

初日(6月6日) まとめの議論

(1)座長(臼田-佐藤)からのイントロ

私達、天文教育普及研究会・ユニバーサルデザインワーキンググループ(UDWG)では、共に宇宙に触れて学ぶ喜びを共有するための「ユニバーサルデザイン・天文教育ガイドブック」(仮称)作りをめざしています。UDWGのメンバーのほとんどは天文の専門家であって、障害者福祉においては素人です。WG発足当時は、興味はあるが、どう始めてよいかわからないという状態でした。今日の参加者の皆様の中にも、そういう方がいらっしゃると思います。

そこで、活動を始める・続ける上で大切だと思われることを3点挙げさせていただきます。

1. 普遍性を生み出す活動を目指す

障害者など特定の人を対象の活動が、その枠をこえてすべての人が楽しめる活動になる、それが「ユニバーサル」デザインです。午前のセッションで広瀬浩二郎さん(国立民族博物館)から、視覚障害者・晴眼者を問わず、さわる・触れる文化の意義をご紹介いただきました。また、神田美子さん(にこにこトマト)からは小児病棟での活動を通じて「人はみな、良い刺激を受けて楽しく豊かな時間を過ごすことが大切だ」ということをご指摘いただきました。こういった大きな概念を天文教育にあてはめると、遠すぎて誰もさわることのできない宇宙を、障害の有無に関わらず、どのようにわかりやすく伝え、共に楽しめるかが課題だと思われます。

2. 実践例の開発・情報収集

午後のセッション1で、視覚障害者と共に楽しむ教材の具体例、例えば天体写真の点図(触図)化、盲学校での実践例などが紹介されました。また、重度身障者が観望会で楽しめるための望遠鏡接眼部の開発やホスピスでの観望会の報告がありました。

3. 多くの方と共に活動をつくりあげていくネットワーク作り

午後のセッション2で、視覚障害者と一緒にプラネタリウム番組製作や合宿などを行っている「星の語り部」(山梨県立科学館)や、福祉カフェ、市民が創るサイエンスコンサートといった実践例が紹介されました。

2. 実践例の開発、3. ネットワーク作りで重要なのが広瀬浩二郎さん(国立民族博物館)、久部幸次郎さん(関西学院大)が声を大にしておっしゃった「障害者側からの発信」であり、中川律子さん(さかさパンダサイエンスプロダクション)始め多くの講演者が口にした「双方向のコミュニケーション」です。良い教材やネットワークを作るためには、異なる分野、立場の人 — 例えば、障害者と健常者、天文の専門家と福祉の専門家、科学館・天文台スタッフと市民ボランティア — が共に作りあげることが大切です。その時どちらも主役で対等な立場にあります。その際課題となるのが、

- 障害者・健常者双方が新規参加しやすいグループとは？
双方の「心のバリア」は一体何か？どうすれば取り除けるか？
- 発信した情報がしかるべき人に届くには？
障害の有無に関わらず、天文に触れる機会や情報を得るには？
- ネットワークを無理なく広げるには？

が挙げられます。こういった点から議論を始めていただければと思います。

(2) 会場での議論

1. 教材開発・実践へのリクエスト

[高橋玲子(玩具メーカー)]

私は視覚障害者です。点図(触図)もいいですが、それだけではイメージがわきにくいものが多いです。惑星の模型だとか、望遠鏡の実物だとか、実物につながるものに触りたいです。今日はお昼休みに天文台構内のツアーに参加して、本物の望遠鏡に触れて感動しました。

[田中真理(府中市郷土の森博物館)]

私はプラネタリウム解説員ですが、障害者からみて、こういうプログラムが欲しいというリクエストがあれば、聞かせて欲しいです。

[杉中慎(福島市子どもの夢を育む施設こむこむ)]

視覚障害者も楽しめるプラネタリウム番組を制作しましたが、それで感じたことは「視覚障害者相手だからといって、何も構えることはない」ということです。ただ「あれ」「あそこ」といった指示語はさげなければいけません。方向を示す時は「時計の針が3時を指す方向」という風に表現できます。番組制作時にかなり考えて言葉を選びました。良い表現を選ぶと、言葉がひびき、自分自身も感じられます。」

[渡部隆夫(盲人天文同好会)]

私も視覚障害者ですが、生の声で解説するプラネタリウム番組を希望します。良い言葉を選んだ上での朗読を聞くと、イメージがふくらみ、想像できます。ただ、説明をつけすぎると想像が薄れてしまうので、言葉は最低限で表現してほしいです。

[臼田-佐藤功美子(国立天文台ハワイ・座長)]

私はアメリカに住んでいるため、半分英語での生活をしていますが、今日、言葉を1つ1つ丁寧に考えて歌やプラネタリウム番組等を作っている方の話を聞いて、日本語の美しさ、響きの美しさを再認識したような気がします。

2. 国立天文台に期待すること

[藤原晴美]

国立天文台三鷹キャンパスでは、毎年特別公開「三鷹・星と宇宙の日」を開催しており、私は客として毎回参加しています。最近こういった公開イベントが増えたせいか、内容を伝えよう、わかってもらおうとする説明よりも、見せるディスプレイが前面に出ている印象を受けます。説明する人ができる限り自分の言葉で解説するように努力してほしいです。

それから三鷹に限らず一般的な傾向ですが、ガイドする人と一緒にいる障害者が質問した時、ガイドに向かって答える人が多いです。情報を知りたい当事者は障害者なのだから、障害者に向かって答えてほしいです。

視覚障害者の人達ももっと足を運んでほしいと思います。公開日の案内を(視覚障害者の)友人達に流すと「視覚障害者対応はありますか?」とよく質問されました。以前は質問に答えていたのですが、ある時からやめました。そのかわり「自分で行ってみてきて下さい」と言うようにしました。もっと多くの視覚障害者が自分で足を運んで体験し、意見を言ってほしいです。